翻　訳

アメリカ女性と高齢化

三　富　紀　敬

訳出にあたって

本稿は、次の著書の第一章「高齢化の最前線」について訳出したものである。Jessie Allen and Alan Pifer, Women on the front lines, meeting the challenge of an aging America, The Urban Institute Press, 1993, pp.1-270 and i-xv. 本書は、序文のほか10章からなり、13人の執筆者による共同研究の成果である。サウスポート政策分析研究所（SIPA）の助成を得て着手された「女性と人口の高齢化プロジェクト」（89年開始）の成果である。

本書は、女性こそ高齢化の影響をもっとも強く受けるという基本的な理解から出発する。女性は、高齢者とりわけ後期高齢者のなかで多いだけではない。貧困基準に抵触する所得しかもたない高齢者の過半は、女性である。ナーシングホームに入る高齢者と一人暮しの高齢者の多くも、女性である。高齢化の影響をことの他強く受けるのは、高齢女性にとどまるわけではない。介護を主に担うのは、施設であれ家族においてであれ高齢女性を含むすべての年齢階層の女性である。こうして女性は、アメリカにおける人口の高齢化の文字通り最前線に立たされる。

本書は、アメリカの保健、医療、労働、家族などに係わる政策が両性に中立的に編成されているわけではないと批判し、高齢化の最前線にたつ女性についての包括的な分析をもとに改革にむけた提言をおこなっている。

高齢化問題が女性問題であり、そうした理解にそって政策的な吟味をおこなう立場は、本書のほかにもアメリカ国内はもとよりイギリスやわが国でも近年広い支持を得はじめているように思われる[1]。

本稿を通して私たちは、高齢化の最前線に立つアメリカ女性の状態と改革にむけた提言について学び取りながら、わが国における同種の問題を考えるに当っての示唆を得ることができるのではないか、と思われる。

(1) わが国の文献としては、マーサ・N・オザワ／木村尚三郎／伊部英男編『女性のライフサイクル―所得保障の日米比較―』（東大出版会、89年）の第一部第五章、フォーラム女性の生活と展望編『図表でみる女の現在』（ミネルヴァ書房、94年）の第八章を参照されたい。イギリスについては、次の文献のうち特に第一部と第四部が議論の動向をつかむ上で有益である。Sally Baldwin and Jane Falkingham, Social security and social change, new challenges to the Beveridge model, Harvester Wheatsheaf, 1994. あわせてアメリカの最近の文献として次のものが興味深い。Nancy R. Hooyman and Judith Gonyea, Feminist perspectives on family care, policies for gender fustice, Sage Publications, 1995.

アメリカの代表的な新聞が、人口の高齢化に関係する記事を載せない日は、おそらくないであろう。一連の社会的な変化、たとえば高齢者の増加、ごく普通のライフコースとしての高齢期とその延長、労働力の高齢化、家族が要介護高齢者を介護する可能性の広がりは、ますます明らかになりつつある。これらの問題は、すべてよく知られた高齢化のすう勢に根ざす。同時に諸問題は、もっとも直接的にかつ深く女性の生活に影響を与えるという別の傾向とも結びつく。

女性は、高齢化社会の最前線に立たされている。その主な理由を三つあげることができる。第一に、彼女たちは高齢者の過半を超す。第二に、彼女たちは、要介護高齢者の介護の主力である。第三に、彼女たちは、高齢期に経済的に恵まれない境遇に直面する。高齢化のすう勢のうちでもっとも劇的

な人口学上の諸結果は、ベビーブーム世代が21世紀の20－30年代に老齢退職期を迎えるまで起きないかもしれない。しかし、女性の置かれた立場を見すえると、諸問題はその姿をすでに現わしつつある。対応策を近々のうちにとることが、迫られている。

ベビーブーム世代が老齢退職期にかかるよりも前に、とりわけ後期高齢者の数において重要な変化に直面するであろう。85歳以上の高齢者は、1990年から2010年にかけて倍化するであろう。この年齢階層は、慢性的な疾患や障害のために、主として女性に担われる介護をもっとも必要にする人々である。他方、女性の平均年齢は、伸び続ける。50歳以上の女性は、1990年に21歳以上の全成人女性の39％を占める。2010年には、全成人女性のおよそ半分にあたる48％が、50歳以上の女性によって占められるであろう。

ベビーブーム世代が高齢者の仲間入りをする2010年以降になると、65歳以上の人口も急速に膨らむであろう。65歳以上の人口は、1990年におよそ3,200万人、総人口中の比率にして13％である。その数は、2020年には5,300万人にのぼる。2030年には、5人に1人のアメリカ人が65歳以上の高齢者である。このうちの800万人以上は、ほとんど女性からなる85歳以上の後期高齢者である（連邦統計局、1989年）。

本書は、一人で暮らす高齢者の中での貧困化率の高さ、在宅介護と有給の仕事とを同時に担う上での中年女性の直面する格闘、メディケイド基金の財政問題、増え続ける保健・医療職における女性の位置、評価の分れる予防医療の費用節減効果および労働力における女性の地位などの女性にとって見落すわけにいかない一連の問題を扱う。人口の高齢化は、これらの問題にすべて波及する。対応する政策は、その効果をあげるために高齢化のすう勢に注意を払うことになろう。アメリカ合衆国の労働力、保健および家族による介護に関して効果的な社会政策を組み立てようとするならば、アメリカ人女性への人口高齢化の影響を見落すわけにいかない。

1　女性と高齢化

高齢化のすう勢が女性にとりわけ大きな意味をもっという時、そのもっとも明白な理由は、最大多数の高齢者が女性であることである。女性は、彼女たちの相対的に長い寿命からして高齢者の多数を占める。85歳以上の女性は、同じ年齢階層の男性よりも三倍多い。実際に、この後期高齢者の急速な増加は、長命を記録する女性のかってないほどの数に主として起因する。しかし、生活が人口の高齢化によって影響されるのは、なにも高齢女性だけではない。

第二に重要なことは、女性が、今日では有給の労働力の半分近くを占めるにもかかわらず、無給の介護労働のほとんどを背負い込むことである。体が弱り障害をもつ高齢者とその増加は、すべての年齢階層の女性にとって主要な生活問題のひとつになるとともに、女性の将来にわたる経済的な地位と労働力としての生産性にも陰を落す。女性の長命と介護者としての終生の役割―労働、保健、老齢退職に関する基準と政策は、これらの事情を見落す社会にあって―は、高齢女性の経済的に不利な境遇の一因である。

第三に重要なことは、多くの高齢女性が経済的にゆとりのある生活を営むほどの資力を持ちあわせないことである。65歳以上の女性のおよそ3人に1人は、貧困基準の150％を下まわる所得しかもたない。女性は、このために高齢貧困者のおよそ4分の3を占める。

以下に続く各章は、女性、広くいえば社会全体にもたらされる高齢化の諸結果を扱う。どの章も、女性、家族問題、保健および高齢女性の社会的経済的な地位にかかわる公的ならびに私的部門の政策上の刷新の必要性を説いている。

執筆者の考えは、この本の多くの論点について、一致している。しかし、高齢化のすう勢とその政策上の意味について、完全に合意されているかといえば、そうではない。たとえば、第二章は、女性の年金加入率の将来的な上昇について強調する。他方、第七章は、老齢年金所得の性別格差の持続について力説する。二つの予測ともはずれるかもしれないし、的を得るかもしれない。二つともに、将来の社会保障と年金政策の信頼しうる分析にあたって、考慮に入れなければならない。解釈や力点の置き方のちがいを残したのは、編集者の判断による。読者は、これによって問題についての多彩な見通しに接することができよう。

2　中心になる四つのテーマ

将来の見通しについての判断のちがいや一連の広い課題を扱うとはいっても、数少ない重要な考え方が、さまざまな文脈の中でくり返し述べられる。特に、四つの中心的なテーマについて指摘しておきたい。高齢者人口における差異とこの差異の政策的な意味、高齢者介護の需要をまかなうに必要な社会の変化、女性の介護役割を社会として認める方法と介護になんら価値を認めないやり方との対立、最後に、世代を超えて現われる女性の問題、これらである。

テーマ1　高齢者の間の差異　本書の全体を通した主要なテーマのひとつは、増え続ける高齢人口における差異を政策のうえで認めることである。高齢男性と高齢女性との差異は、政策決定のうえでとりわけ重要である。両性に中立的であると見做される諸政策は、実のところ女性に差別的である。第六章では、社会保障政策が高齢男性の仕事と婚姻経験を特別視する傾向をもつことから、高齢女性の貧困化に与していることについて述べる。同じように、人種と民族、年齢および家族状態のような諸要因にかかわる高齢女性間の差異も、認めなければならない。

高齢者を均一の集団と見る傾向は、高齢女性にとって特に有害である。彼女たちは、高齢化のごく普通のパターンと考えられ組立てられた政策の枠外にしばしば放り出される。たとえば、高齢のアメリカ人の多くが結婚し、貧困基準を上まわる所得を得ていることは、たしかである。しかし、すべての高齢者が、これにあてはまるわけではなく、殊に女性にとってそのようにいえないことは、たしかである。高齢の既婚女性（65歳以上）は、第二章の人口学的な概観に述べるように同じ高齢の既婚男性よりもはるかに少ない。前者は、後者の77％に対して42％である（1990年）。両者の格差は、年齢階層の上昇とともに広がる。75歳以上の高齢女性のわずかに26％が既婚であるのに対して同じ年齢階層の男性となると70％である（1990年）。

いくつかの章では、高齢女性の直面する経済問題の原因と将来的な変化の見通しについて検討する。経済上のかなりの差異が、同じ高齢女性といっても人種や民族に応じて存在することも、述べられる。黒人の高齢女性が貧困に陥る比率は、第七章に示されるように白人の高齢女性の三倍にのぼる。高齢期の貧困は、既婚状態とも密接につながりをもつ。一人暮らしの黒人の高齢女性の60％は、第七章における動かしがたい数値に示されるように貧困に陥っている。この数値は、白人の夫婦世帯の貧困比率である4％と対照的である。同じ高齢者とはいっても、性、年齢、民族および生活上の地位によって実に様々な経済状態が現われる。

女性は、加齢につれて夫と一緒に生活する比率も低下する。女性の相対的に長い寿命、典型的な結婚年齢のパターン、高い離婚率、これらすべてが、高齢女性の一人暮らしとなって現われる。さらに、老齢退職と年金政策は、既婚者と高齢の男性により有利な諸条件を用意する。高齢女性が一人とり残されて貧困に陥った時でさえ、社会は、彼女を悲劇的ではあるが単なる事故の当事者として扱い続ける。高齢女性の貧困化は、ことばの上では両性に中立的でありながら、実のところ男性の典型的な生活パターンをもとに設計され、このため女性を不利にする一連の労働、老齢退職、保健および家庭での介護の基準や政策から生まれるべくしてうまれた結果である。

高齢者の性と生活上の地位による経済的な差異は、意義深い改革のなされないかぎり引き続き存在するばかりか、将来的にはさらに広がりさえするであろう。ある研究は、次のことばで結ばれる。「一人暮らしの高齢女性と他のすべての高齢者との隔たりは、将来的にこれといった手さえ打たれないとなると、次の30年間に広がるであろう。高齢のアメリカ人の中での貧困は、2020年までに主として一人暮らしの女性に限られるであろう」（連邦基金委員会、1987年）。

高齢者の中での健康状態の差異も、重要である。高齢のアメリカ人の中での健康状態の差異は、第四章において「死の直前まで健康であり続ける人々が増えるとともに、長期にわたって重度の機能障害を抱える人々も増えるであろう」と分析されるように、ますますはっきりと言明される。この差異は、第五章において強調されるように高齢化社会の効果的な保健政策を立案する上に決定的

とも言えるほど重要である。予防保健計画が、健康に生活する年数の延長として効果的に実を結ぶためには、第五章の筆者が述べるように障害の高い危険を抱えた利用者の多くを計画の対象外に取り残すようであってはならない。機能障害を抱えるかどうかの確率上の差異は、社会経済的な地位、性、人種と民族および年齢などの要因としばしば符合する。

ここでの実際上の政策問題は、危険度の大きい人々の参加を認めて金銭の支出を行なうことによって、予防計画の費用効果を取り戻し、さらに高めることにある。しかし、高齢女性の中での差異は、保健政策においてしばしば無視される。65－74歳層の黒人女性の心臓疾患による死亡は、第五章の筆者の指摘するところによると同一年齢階層にある白人女性のほぼ二倍である。しかし、黒人女性を、心臓疾患の危険度の特に高い集団と同一視するわけにいかない。65歳以上の女性の心臓疾患の危険因子を減らすための効果的な予防法について、これといった研究はない。心臓疾患の予防研究は、わずかな例外を除くともっぱら若い男性に焦点をあてたものである。

テーマ2　高齢者介護について高まる需要と諸結果、本書でくり返し扱う二つ目のテーマは、その多くが障害を持つゆえに介護を必要とする後期高齢者の増加と、これにともなう社会的な変化の広がりである。高齢者介護の高まる要因は、職場と公共政策に変更のないかぎり、女性の労働力率と抵触して、女性の経済的地位の向上を遅らせるとともに、多くの女性とその家族の生活をさらにむずかしくする。高齢者介護への需要は、女性への影響を通して保健の利用と財政、労働力の生産性および児童の福祉にも波及する。高齢者介護への高まる需要は、高齢女性に続く世代の経済的な悲惨さにもつらなる。中年女性は、障害をもつ高齢の親戚の介護をひとたび引き受けると所得、健康保険および年金の権利を犠牲にせざるをえない。第三章の執筆者たちが、これらの問題を立ち入って分析する。しかし、高齢者介護への需要の高まりとその影響は、あまりに広い範囲に亘ることから、本書のすべての章が、この大きな社会的なすう勢の諸側面を扱う。

テーマ3　介護と社会的な価値　論じられはじめたテーマのひとつは、女性の担う介護や養育を社会的に認知する立場と、そうした接近方法を認めない見地との衝突である。介護は、第3章で指摘されるように軽侮を以ってとらえられ、経済的にはこれといった価値をもたないと考え続けられている。介護の価値を社会的に認知するかどうかは、介護労働の有償労働と無償労働とへの配分とは別の問題であり、女性のおこなう選択と就業期に直面する障害に影響する。

高齢化社会に高い生活水準を維持するうえでの焦点のひとつは、多くの章において示唆するように「介護の道義」の再評価とこれにそう支援の拡大であろう。この道義は、第六章の筆者たちによる高齢女性へのインタビューでの観察によると、諸個人の交わりと相互依存の感知から生まれる。しかし、20世紀に女性の手にした社会的政治的な進歩は、広くいえば彼女たちの自律性の拡大の認知をもとにする。養育に対するわれわれの社会の相対立する態度についていうと、高齢女性の社会的な役割を拡げようとするならば、第8章の筆者が主張するように彼女たちの伝統的な養育役割のもつ重要な貢献を認めなければならない。われわれは、介護を生産的な労働と見るのであろうか。女性を伝統的な役割から自由にする道は、新しい役割の付加あるいは古くからの伝統的な役割の再評価もしくはその両者によるのであろうか。社会の認める優先順位は、この問題についてどのようであろうか。

高齢化社会は、性による平等と介護の道義の双方を促進する方策を見つけなければならない。問題は、どんな風に進めるかである。いくつかの接近方法が、以下の各章において提案され示唆される。それらは、少年と成人男性における養育的な態度の育成および相互依存関係の自覚、家族による介護に寛容な企業風土への転換、有償でおこなわれる介護労働の条件の改善、介護の両性への平等な再分配、無償の介護労働に対する経済的な補償とその引上げ、これらを含む。

これらは、いずれも解決の容易でない大きな問題である。本書の各章では、それらの接近方法が女性への高齢化の影響と社会的な諸結果によってどのように左右されるかについて、指摘する。

テーマ4　世代を超える問題　本書でくり返し扱われる第4のテーマは、女性の独自の位置、すなわち女性が世代にまたがる問題を抱える一家族の介護者として個人的に、また生涯におよぶ経済問題に直面する集団として社会的に一位置にあることである。高齢化社会における女性の状態について検討する場合、いつとはなしに忘れ去られがちなことがある。それは、二世代以上にわたる争いこそ資源をめぐる衝突の最たるものである、という考えである。体の弱い高齢者と子供の双方の主な介護者は、なんといっても女子である。高齢の独身女性と若い未婚の母親が、貧困者の中で不つりあいなほど多いことも、これまた事実である。子供と高齢者への関心は、家族による介護を支援し女性の経済的な地位を改善するための労働、教育および保健政策において重なりあう。さらに、子供の不遇な状態は、高齢者への所得とサービスの不当なまでの移転の結果だという見方もある。この見方は、高齢者を豊かもしくは少なくとも安定した人口層だとする一般的な受け止め方を、ある程度よりどころにする。高齢女性の経済的な障害は、とりわけ一人暮しの高齢女性と有色の高齢女性の場合にこれまでと同じく避けて通るわけにいかない。高齢者を豊かな人口層とするさきの見方は、このように考えると支持するわけにいかない。

3　高齢化社会の女性のための政策上の優先性

人口の高齢化は、高齢者の直面する諸問題や介護者への関心を高めるとともに、高齢者のための政策の具体化の可能性を広げつつある。危惧されるのは、諸々の改革が第八章の筆者によって指摘されるように断片的で、問題のうわっつらをなでた程度のものであり、また、短い間に放棄される類のものに終始して、結局のところ基本的な問題が解決されないままになるのではないか、ということである。

しかし、多くの章で提案される大胆で基本的な政策上の変更は、成しとげにくいこともたしかである。諸改革のうちのいくつかには、相当の政治的な対立もある。他の改革も、費用をだれが負担するかについて激しいやり取りがある。本書の主な目的は、高齢化が女性にもたらす複雑多岐な諸結果を包括的に分析するとともに、幅広い政策上の改革を促す視角から諸結果を定義づけることである。本書のめざすところは、過去に暗示された諸改革に新しい考えを盛り込むとともに、古くからの問題に新しい視角から迫ることによって、創造的な解決を提言することにある。

本書の挑戦は、高齢女性の差別をともなわない高齢化社会への統合、職場に働く女性のための真の平等、老齢退職制度の拡充と公平性の確保、効果的で十分なロングタームケアの提供、高齢人口のもつかけがえのない能力の活用、これらを内容にする新しい政策的なこころみを示すことになろう。このためには、次のことをしっかりと記憶しておかなければならないであろう。すなわち、高齢化のすう勢は、女性の変化しつつある役割と交差することである。これは、家族休暇と医療休暇の法制化をはじめ従業員老齢退職計画の立案、国民健康保険計画の検討、年金と老齢退職計画の決定にまたがる多方面の政策決定に意味をもつ。

高齢化のすう勢に関する多くの見通しは、高齢化の長期におよぶ動向について強調し、高齢化のピークを21世紀の中葉に迎えると推測する。この見通しは、政策的な対応の緊急性を説く議論に水をさすきらいがある。しかし、女性への影響について分析する本書は、人口の高齢化の諸結果が今日すでに広く現われ、しかも、今後の10－20年間にいよいよ広がるであろうことについて強調する。

高齢者介護に対する需要の増大は、特に殆どの女性が有給の労働力として就業している時代にあって、介護の社会的な扱いにひそむ矛盾を露呈させるであろう。女性が介護の役割を期待される一方で、ほかならぬ介護の価値を貶しめる経済制度の中で不利な立場に置かれるのは、彼女たちにとって明らかに不公平である。しかし、これといった改善さえも、最近までこの矛盾を正すためになされなかったことから、広い範囲の社会問題を生んでいる。本書から発せられる主要なメッセージについていえば、扶養家族による介護を過度に追い求めることは、それが有償であれ無償の仕事であれ自己矛盾であり、不公平で効果にも乏しいという考え方である。女性と家族、労働生産性への有害な影響は、すでに現われている。これらの影響は、高齢化のすう勢が進み、しかるべき

対応もなされないならば、間を置かずにひどくなる。

4　本書の章別の構成

本書の第一章は、高齢化に向けアメリカ合衆国の女性について、その人口学上の概観をおこなう。介護政策の中心問題についての章である。

第2章は、統計的な資料を提供して、のちの諸章における多彩な議論のための素材を用意する。この章の目的は、増加する高齢人口とりわけ高齢女性の特徴とその変化について吟味することである。介護の需要に影響をおよぼす身体などの障害や依存の動向について議論するとともに、若い女性の教育および就業の動き―人口の高齢化が彼女たちの生活に及ぼす影響をある程度決める―についても検討する。高齢化社会の多様性とその増大について、一貫して強調する。

第3章は、障害をもつ高齢者の増加をきっかけにする扶養家族の介護危機について検討する。これは、本書の主要なテーマであり、さまざまな文脈の中でくり返し取り上げられる。この章は、介護問題について広く全国民的な視野からの接近を試みながら、今日的な政策のもつ基本的な性格を描き出す。基本的な政策目標が提示され、吟味される。

続く2つの章は、保健と女性の健康について扱う。第4章は、アメリカにおいてもっとも緊急を要する保健政策問題のいくつかについて、新しい視角から検討する。筆者たちは、メディケアの費用をはじめ保健分野の労働力不足、民間保険に加入しない人々への健康保険の適用およびロングタームケアのメディケイドからの除外などの問題を検討しながら、保健の消費者であり、かつまた提供者でもある女性の二重の役割について分析する。

第5章は、高齢女性むけの予防サービスの発展に影響する経済ならびに保健政策について分析する。この章は、高齢人口の増え続ける中で、より大きな予防上の努力に金銭をさかない場合を想定して、高齢女性と社会にもたらされるであろう諸結果について分析する。

続く3つの章は、高齢女性の社会的経済的な地位―就業と老齢退職の経験、人種による差異、彼女たちの社会的な役割を拡張する必要―について扱う。第6章は、女性の労働力率の上昇と人口の高齢化に焦点を絞って分析する。対象にした集団についての調査は、これまでほとんど手つかずであった少数民族の高齢女性の労働力化についての見取り図を提供する。高齢女性の次の世代のための就業と老齢退職の改善にむけた政策が、提示される。

第7章は、少数民族に属する高齢女性の経済的な地位について詳しく検討する。この章は、有色の高齢女性における経済的な格差を生活の地位と年齢別に分析し、あわせて少数民族の女性の収入源と彼女たちに多い貧困との関連について研究しながら、将来的に変化の期待される領域について検討する。

第8章は、高齢女性の社会的な排除をもたらす多くの要因について分析する。この章は、社会的な変化について実際的な研究方法を取り、これまで多くの高齢女性にごくわずかしか認められてこなかった役割を拡げるための具体的な提案を示す。

最後の2つの章は、8章までの議論の哲学的かつ政策的な意味について扱う。第9章は、高齢者介護への高まる需要について取り上げ、これまでのところ女性にもっぱら負わされてきた介護を男性にも分担させるならば―政策上の改革に組み込まれてのことであるが―両性の平等を確保することになろう、と述べる。

第10章は、高齢化の女性への影響とこの影響を通しての人的資本問題への波及について扱い、一連の政策上の前提を描き出す。

参考文献

Commonwealth Fund Commission on Elderly People Living Alone. 1987. Old, Alone, and Poor: A Plan for Reducing Poverty among Elderly People Living Alone. Baltimore, Md.: Commonwealth Fund Commission on Elderly People Living Alone, Johns Hopkins University.

U.S. Bureau of the Census. 1989. "Projections of the Population of the United States, by Age, Sex and Race: 1988 to 2080," by Gregory Spencer. Current Population Reports, ser. P-25, no. 1018. Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office.